早乙女勝元
小説選集
5

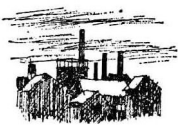
ゆびきり

早乙女勝元小説選集

5

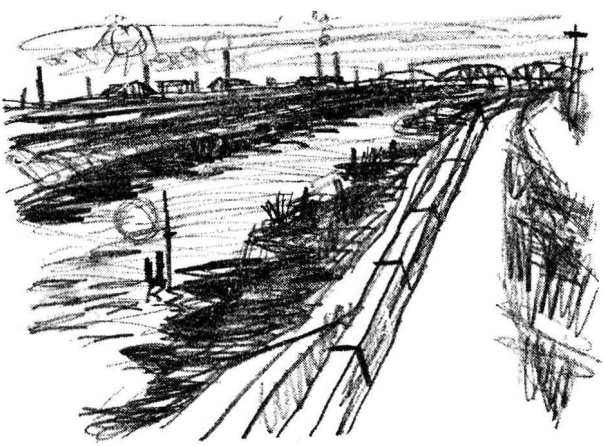
ゆびきり

早乙女勝元小説選集・5
ゆびきり
1961・初版
作者　早乙女勝元©
画家　久米宏一



制作　小宮山量平
発行　山村光司
株式会社　理論社
東京都新宿区若松町一〇四
電話　〇三(203)五七九一
振替　東京九—九五七三六
B6判　262P　0393—90905—8924
一九七九年　八月　第三刷

ゆびきり

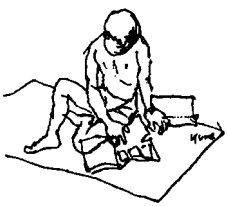


もくじ

路地うらから 5
海ほおずき 22
サイカホール 40
ひとだま 58
土曜日の午後 74
雪うさぎ 92
鬼 112

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

おばけ屋敷 131
ブラジルにて 151
C5927 169
がんばれ 昌次！ 187
くろい犬 206
火の夜 225
路地うらの記憶 247
てのひら自叙伝〈5〉 261



そうてい・カット

久米宏一

▨ 路地うらから

〝冒険ダン吉〟をよみおえて、ああーッと、一つ大きなあくびをすると、きゅうにトタン屋根をたたく小雨の音が、昌次の耳にきこえはじめた。

学校からかえってきたとき、空は灰色によどんでいたが、西のほうはまだ薄桃色にあかるくて、電信線にからみついたタコの尾が、ぴらぴらと風になびいていた。その風にのって、いつのまにか、小つぶの雨がおちてきたものらしい。

六畳ひとまきりの部屋は、ぼんやりとうすぐらくて、だれもいないのだ。昌次は、マンガ本をすててたちあがると、部屋のすみの、戸だなをあけてみた。

黄色くしなびたたくあんのきれはしが、二つ三つ、わびしく小皿にのっているだけで、口にはいるようなものは、なにもなかった。どこかに糖分をみつけたものか、小蟻が二ひき、戸だなのおくの暗いかげだまりを、一列にならんであるいてゆく。

昌次は手づかみで、たくあんをとって、口のなかへほうりこんだ。

コリッコリッ……という音が、だれもいない部屋のなかに、みょうに大きな音をたてると、うっと、胸につまるようなさびしさが、こみあげてくる。

雨がふっているとはいえ、窓のそとはまだあかるくて、路地うらのせまい空間をぬって、黒いコ

ウモリがとびはね、トーフ屋のラッパの音がきこえるまでには、まだ二時間、いや、もっとあるかもしれない。

暗い天井からさがっている裸電球が、ぱッとひとりでにつく時間が六時で、それからでなければ、母も、姉のトシもかえってこないのだ。

二時間……ああ、まだ二時間もある。

昌次は、ぼしょんと、肩をすぼめた。

かぼそい風がふいてきて、南の窓ガラスをたたいた。あまりの時間の長さに、昌次は気が遠くなり、ほそめに窓をあけて、路地うらの道をのぞいてみた。

この部屋が、二階にあるせいか、屋根と屋根のくろいかさなりがみえて、すぐ目の下を、ほそい路地が、くねくねと、ヘビのようにうねっている。

ふと、昌次は、いいことをおもいついた。

画用紙をクルクルとまるめて手にもつと、そのつつさきを、窓と戸のすきまにはさみこむ。畳にべったりすわって、紙づつの一方に目をおしあててみた。

「やッ、みえるみえる！」

ちいさなまるい空間に、路地うらの一部分があざやかにうきあがって、それは、ビックリするほど立体的なのだ。

昌次は、おもしろくなって、紙の望遠鏡を右から左へと、ゆっくりうごかした。

雨にぬれた背なかを、ぶるッとゆすって、ドブ板の上をあるいていったのは、床下にすむハゲ猫だ。そのあとから、かさばったつつみを、まえかけにくるんだ花屋のおばさんが、腰をふりふり、

いそいでゆく。
望遠鏡をまわして、おばさんのまえかけに、ぴったりとつつさきをあてると、ホヤホヤと白い湯気がみえて、それは、やきたての今川やきか、ヤキイモとよめた。
「ち！」
昌次は、舌をならした。
たまらなく、腹がへったのだ。
このとき、階段のほうに、なにか、みょうな物音がきこえたような気がした。
昌次は、びくっと、うしろをふりかえってみた。トシがかえってきたのかと、やぶれた障子のすきまから、階段をのぞいてみたが、人影はない。ないのがあたりまえで、今ごろ、だれもくるはずがないのだ。フフンと小鼻をふくらませて、昌次はふしぎそうに、くびをかしげた。
と、こんどはすぐ目と鼻のさきで、ザラザラッと、なにか、砂のこぼれるような音！　かべぎわの畳の上で、たしかに、その音がきこえたのだ。
昌次は、はっと息をのみ、からだをかがめて、音のほうにはいずっていった。
右手を、畳の上にのばしてみた。指さきに、ざらッと砂がつく。――ハハア、これは、ネズ公だな。畳の上からかべにそって、目をつりあげていったとたん、
「あはッ！」
昌次は、おどろいて、目をまるくした。
かべのとちゅう、ちょうど、昌次の目のたかさほどのところに、ぽっかりと、エンピツのあたまほどの穴があいている。

穴のまわりから、ザラザラと砂がこぼれおちて、それは、みるみるうちに大きくなり、たちまち、小指のはいるぐらいのものになった。ネズ公ではない。だれかむこうから、かべをほじくっているやつがいるのだ。

すると、穴のむこうで、かすかなしのびわらいがきこえて、

「そこにいるの、昌ちゃんだろ?」

と、はずんだ少女の声。

昌次は、おどろいて、目をむいた。

かべ穴のなかで、黒いちいさな瞳が、クルクル、ビー玉のようにうごいて、わらっている。

となりのもも子だ。とんでもないやつだ。

「こんなことして、おこられッからな。おれ、しらないぞ、しらないぞ!」

「へいきだよ」

もも子の声は、すこしもひるまず、

「あとで紙はっとけばいいんじゃんか。その上に、ハナクソでもなすりつけとけば、ぜんぜんわからないよ。チットは、あたま、はたらかせろや。それよか昌ちゃん、おもしろいぞ、のぞいてみ!」

昌次は、〝ちくしょう〟と口をとがらせたが、もも子にそういわれたからには、のぞかなければそんだ。ちいさな穴のむこうに、まったくべつな世界でも、ひらけているような気がする。

昌次は、てれくさそうに頭をかいて、片目をつむった。

「なんだ、まっくらだ」

「あんまり、びっしゃり、おしつけっからさ。すこうし、はなしてみろや」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

「あ、みえるぞ、みえるぞ」
「なにがみえる？」
「茶色い目ン玉だ。けど、一つ目小僧みたいで、うすきみわるいな」
「小僧は昌ちゃんだろ？　あたいは、れっきとした女の子だ」
「バカ！」
「学校で先生がいってたぞ。バカといったほうが、ほんものの馬鹿なんだって」
くっくっと、のどをならして、もも子は笑った。
昌次は、右手のひとさし指で、エイッとばかりに、もも子の目をついやてろうかとおもった。が、やめにした。めくらにでもなったら、一大事。いまに大きくなって、お嫁にゆけなくなる。
「こっち、あそびにこないか？」
「ヤだ」
昌次は、そくざにこたえた。
「女のところなんか、ゆけっかい。女くさくッてよう」
「そいだって、昌ちゃん。あのな、オモシロイもんがあんだぞう……」
「なんだそりゃ？」
「ヒ・ミ・ツ」
「ゆけば、みせっか？」
「ウソなんか、いいっこなしだ」
「よし！」

「はやくこいや」
「じゃ、ものほしからゆく」
かべぎわからはなれたとたん、急に手足に、ピィンと、力がついたようだった。
昌次は、いきおいよく、南のガラス戸をあけた。
雨はやんでいたが、ものほしはぬれており、たっぷり水気をふくんだ木が、ぶよぶよと、足のへらにすいついた。
昌次は、つまさきだけで、ひらりと手すりをのりこえると、ぬき足さし足、カワラをふんで、もも子の家の、ものほしにとびついた。ものほしの木はくさっていて、赤くさびた釘が、あらわにとびだしていた。

*

昌次たちのすんでいるこの二階の、うらぶれたハモニカ長屋は、あらかべ一つへだてて、みんなおなじ間どりになっていた。
階下はまた、べつの家になっていて、昌次の家の下では、〝チー、パチン〟と、一日じゅうガラス板から、まるいガラス玉をぬいている老人がいれば、もも子の家の下には、布バフで、一日じゅうメガネのふちをみがく夫婦がいた。
おなじカワラの下、あらかべ一つへだてて、それらの人びとが、せせこましい空間にひしめきあって、生活しているのだった。だから、ものほし一つとってみても、そのつくりかた、いたみぐあいは、ほとんどかわらない。
くさった手すりをまたいで、となりのものほしにとびつくと、そこはもう、もも子の家で、ガラ

ス戸は、大きくあけはなされていた。おびえているようにおもわれるのは、シャクなので、昌次は腹をきめて、ドスンと、いきおいよく、部屋のなかにとびおりた。

やっぱり、六畳ひとまきりの部屋だったが、ぷーんと、みょうなにおいがたちこめ、これはまた、なんとにぎやかなのだろう。雨で、あわててとりこんだものか、色あせたおむつが、いちめんにちらばり、そのなかから、シミのついたおかわがはみでている。しかし、ふしぎなことに、もも子の姿がみえない。どこへいったのだろう?……

昌次は、ぐるりと、部屋のなかをみまわした。

かべに、〝欲しがりません勝つまでは〟のポスターと、爆弾三勇士のガクがかざられ、爆弾をかかえた三つの顔が、必死の形相でならんでいる。と、そのよこにさがっていたどてらのすそが、ぶわーんとめくれあがって、

「ばあ!」

もも子が、いきなり昌次の目のまえにとびだしてきた。

昌次は、おどろいてとびあがり、

「バカッ、ふざけんな!」

と、ムキになっておこった。

昌次とおなじ五年生なのに、もも子のからだは、こぢんまりとやせていて、ひどく、かぼそかった。手も足も、棒のようにくろくてほそい。そのくせ、あつでの濃い髪の下で、つぶらな目が、キビキビとよくうごく。

「おもしろいモンって、なんだ?」

「ふふふ……」
片目をつむって、もも子は、ずるそうな笑い顔をつくった。
「あたい、そんなこといったっけかなあ？」
「こいつ、約束をやぶったな！」
そういって、昌次はむっと口のまわりをふくらませた。
「そんな、おこらなくたっていいじゃんか。昌ちゃんは、おこりっぽいんだな。まるで、うちの雷とうちゃんそっくりだ」
「おれ、約束やぶるやつは、大ッきらいだ」
「まだ、やぶってないじゃ。そう、あわてなさんなって」
もも子は、肩をすくめるようにして、大人びたしぐさをしてみせると、かべぎわの、茶ダンスのほうにあるいていった。
きずだらけの茶ダンスの上には、七色とうがらしのつつや、首のとれたねむり人形や、手あかでよごれたコケシなどが、いっしょくたにのっていた。
もも子は、そのなかから、すばやくなにかをつかんで、昌次の耳におしつけた。
「ひえッ！」
昌次は、くすぐったそうに、くびをすくめた。
「ほら、きいてみ」
「な、なんだイ？」
「時計の音だよ」

「……？」
「この音、いったいぜんたい、なんてきこえる？」
「カチカチ・・・じゃないか」
首をねじってみれば、ふちのはげた、ちいさなメザマシ時計。時計は、ものうい音をたてて、セコンドをきざんでいる。
「昌ちゃん、しってるかい？　この音な、日本人にはカッチカッチだけど、イギリス人には、チックタックチックタックって、きこえるんだよ。アメリカ人には、チックチック、そいから支那へゆくと、チッコチッコさ。いろいろにきこえるんだよ。な？　おもしろいだろう？」
「フーン」
昌次は、感心した。
もも子は、ふしぎなことをしっている。ほんとかどうかメザマシをとって、あらためて、耳におしつけてみた。
じいっと、耳をすませてみると、なるほど、もも子のことばの一つ一つが、みんなあてはまる。
昌次は、よろこびがこみあげてきて、ニッと、目じりをさげた。
「だけどサ、昌ちゃん。ほんとは、もっといいもんがあんだよ」
「え？　どこに？」
「では、二ばんめに、うつりマアス！」
いうがはやいか、もも子はいきなり、茶色い箱を、昌次の鼻さきにつきつけた。
昌次は、うわッとのけぞった。いつのまに、どこからとりだしてきたものか、かなりの大きさの

ボール箱だった。
「これ、なにがはいってる？」
昌次は、目をかがやかした。
「うふッ、きいてみりゃわかるさ」
もも子の黒目がちの目が、いたずらっぽく光る。で、昌次は、おずおずと箱のそばに、耳をよせた。
「やッ！　なんかうごいてるな、ゴソゴソッと……」
「それでは、魔法の箱を、あけてみるゾョ。いち、に、さん。ほうら！」
声とどうじに、ぱっと、ボール箱のふたがあけられた。
「うわッ」
昌次は、大きく目をひらいた。
箱のなかにうずくまっていたものは、両手のなかに、すっぽりはいるほどの、かわいい小犬。
やわらかい毛なみのあいだに、ぽつぽつと、茶色いはんてんがういている。足もともおぼつかなく、鼻をヒクヒクさせているところをみれば、小犬は、まだうまれたてのほやほやだ。
「どうしたの、この犬？」
「それが……」
と、もも子は、急にまゆをひそめて、
「今日、これから、すてにいかなくちゃなンないんだよ」
「え？」
昌次は、おどろいて、ききなおした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.